

## 修身教科書にあらわれた理想的日本人像

三角 同\* 橋口英俊\*\* 鮎川成子\* 今井啓子\*\*\*

(昭和 53 年 9 月 30 日 受理)

### The Ideal Image of Japanese in the Textbook of *Shūshin*.

Hitoshi MISUMI, Hidetoshi HASHIGUCHI, Shigeko AYUKAWA, Keiko IMAI,

(Received September 30, 1978)

#### はじめに

一個の人間が成長していく過程には、数々の人との出会いがある。その出会いは、必ずしも現実に出会うことだけを意味するのではない。なんらかの媒介を通して知ることのできた人々との出会いもまた貴重である。出会いの根底には愛があり、愛があるからこそ個人を主体的な、自由な人間として尊重できるのである。つまり、人間尊重、生命尊重である。

人はその出会いを通じ、多くの人としての役割を学び、また、自分自身の役割をも学んでいく。すなわちそこで人は自分のアイデンティティにふさわしい人物像をできるだけつかもうとするであろうし、また、時代・社会は、そうした理想的人間像を求め、教育という場をかりて、それを教科書に取りあげようとする。そして人は少なからず、それを自己の一部として取り入れ成長していくのである。それが「教科書が日本人を作った<sup>1)</sup>」といわれるゆえんでもある。

我々は先に、国定期の国語教科書について検討したが、その結果、時代・社会のもつ価値観をかなり敏感に先取りしていることがわかった<sup>2)</sup>。そこで今回は、国定期の教科書のうち、最も国家の意志と直結していたと思われる、修身教科書を取りあげ、特に、その中に描かれている理想的日本人像(よい日本人)に焦点をあわせて分析することにした。その際、我々がこれまで行ってきた、人が人として生きる原点である、人間尊重、生命尊重、およびそれを実現する過程との関連で、達成動機を主たる分析の視点とした。

それぞれの時代・社会は、国家としてどのような日本人を必要とし、どのような人物を理想的日本人像としていたのか、それはまた、どのような歴史的道程を日本人に歩ませようとしていたのかを、具体的に提示することが本論文の目的である。

#### 方 法

1. 修身教科書の時期による区分、および分析に用いた資料は、橋口、三角ほか<sup>3)</sup>による。
2. 国定Ⅰ期以降Ⅴ期までの小学校修身教科書について、以下の方法により分析し、検討する。

(1) 領域別分類；修身という教科の特質を考慮し、よ

表 1

領域	カ テ ゴ リ ー
個 人	1. 勤勉・勤労, 2. 創意・工夫, 3. 自立・自営, 4. 進取, 5. 勇気, 6. 自信, 7. 忍耐, 8. 健康・安全, 9. 謙遜, 10. 儉約, 11. 習慣・規律, 12. 正直・誠実, 13. 迷信, 14. 責任,
家 庭	15. 孝行, 16. 祖先, 17. 親子, 18. 兄弟, 19. 親類, 20. 召使, 21. 男女,
社 会	22. 公衆道徳, 23. 公益, 24. 敬老, 25. 謝恩, 26. 礼儀, 27. 協同, 28. 規則, 29. 公正, 30. 寛容, 31. 師弟, 32. 友愛, 33. 博愛・親切, 34. 公民,
国 家	35. 軍国主義, 36. 祝祭日, 37. 法律, 38. 天皇, 39. 皇室, 40. 皇大神宮, 41. 国旗・国歌, 42. 国体, 43. 忠義・信 義, 44. 国交・親善,
総括	45. よい日本人

\*児童学科研究室 \*\*臨床心理学研究室 \*\*\*教材研究室

り現実に即した内容分析をする目的で、唐沢<sup>4)</sup>を参考に、表1のように、「個人」、「家庭」、「社会」、「国家」、「総括」の5つの方向を定め、それぞれ、個人；14、家庭；7、社会；13、国家；10、総括；1の計45の下位カテゴリーを設定する。原則として分類に際しては重複を許し、特定の内容に無理に分類することは避ける。但し45の「よい日本人」は別の方法による。

(2) 「よい日本人」の分析；総括の領域である「よい日本人」は、修身教科書の全徳目が要約的に述べられ、各期、各学年にまとめとして扱われているため、独自に内容分析する。

a) 生命尊重(L)については、L±2、L±1、L0の5段階、達成動機(A)についてはA+2、A+1、A0と3段階の評定を行なう。両者の意味内容については、橋口、三角ほか<sup>5)</sup>による。

b) 他教科、あるいは修身教科書の各期・各学年と、まとめとしての「よい日本人」との関連をみる目的で国家主義(N)、ミリタリズム(M)など9つのカテゴリーを設定し分類する。それぞれの名称、その内容については橋口、三角ほか<sup>6)</sup>による。

c) a), b)の分析結果を参考にしながら、「よい日本人」で特に強調しようとしている人間像が、時代・社会

表2

期	学年	個														人					家					庭	
		勤働 勞勉	創工 意夫	自自 立營	進 取	勇 氣	自 信	忍 耐	健安 康全	謙 遜	儉 約	習規 慣律	正誠 直実	迷 信	責 任	孝 行	祖 先	親 子	兄 弟	親 類	召 使	男 女					
I	2	0	0	1	0	2	0	0	3	3	1	1	3	0	0	0	0	6	5	0	1	0					
	3	5	1	1	0	2	0	2	1	0	1	0	3	0	0	1	1	2	0	0	0	0					
	4	4	1	1	0	3	1	1	1	0	1	1	2	0	1	1	0	1	1	0	0	1					
	計	9	2	3	0	7	1	3	5	3	3	2	8	0	1	2	1	9	6	0	1	1					
	課数	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81	81				
II	1	2	0	0	0	1	0	0	2	0	1	2	3	0	0	1	0	2	2	0	0	0					
	2	4	0	1	0	2	0	2	1	0	1	1	1	0	0	1	1	5	2	1	1	0					
	3	4	0	0	0	2	0	1	1	0	1	1	2	0	1	1	0	1	1	0	0	0					
	4	8	2	2	1	2	1	1	2	0	1	1	1	1	0	1	0	0	1	0	1	0					
	計	32	9	4	4	11	6	5	8	0	8	8	9	1	2	8	2	8	7	1	3	4					
III	1	3	0	0	0	1	0	0	2	0	1	2	3	0	0	1	0	2	2	0	0	0					
	2	2	2	1	0	2	0	1	1	1	0	2	1	0	0	1	1	4	1	1	1	0					
	3	6	1	0	0	2	0	1	1	0	1	1	2	0	1	1	0	1	1	0	0	0					
	4	9	5	2	1	1	1	2	5	0	3	3	4	1	0	1	0	0	1	0	0	0					
	計	37	14	4	2	9	4	5	9	1	10	10	16	1	2	8	2	8	6	1	1	3					
IV	1	5	0	0	0	0	0	0	2	0	1	3	3	0	0	1	0	3	2	0	0	0					
	2	1	2	4	0	1	0	1	2	0	0	1	2	0	1	1	2	0	1	1	0	0					
	3	6	0	0	0	2	0	2	1	0	1	2	1	0	1	1	0	1	1	0	0	0					
	4	6	5	1	2	1	1	1	3	1	2	3	3	1	1	1	0	0	1	0	0	0					
	計	37	17	7	4	7	3	7	9	1	6	9	14	1	4	8	4	5	7	1	0	3					
V	1	4	0	1	0	0	0	1	4	0	1	3	0	0	1	1	1	4	5	0	0	0					
	2	3	1	1	0	0	0	2	1	0	0	2	0	0	0	0	3	3	2	1	0	0					
	3	6	5	1	0	1	1	3	4	0	0	2	1	0	0	0	0	2	1	0	0	0					
	4	4	4	1	1	2	0	2	2	1	2	1	1	0	0	0	3	0	0	0	0	0					
	計	27	14	4	5	13	2	12	11	2	5	9	4	0	3	2	10	12	9	1	0	3					
課数		120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120				
%		22.5	11.7	3.3	4.2	10.8	1.7	10.0	9.2	1.7	4.2	7.5	3.3	2.5	1.7	8.3	10.0	7.5	0.8	2.5	2.5	2.5					

表 3

期	学年	社 会													国 家										
		道徳	公益	敬老	謝恩	礼儀	協同	規則	公正	寛容	師弟	友愛	親博切愛	公民	主軍義國	祝祭日	法律	天皇	皇室	神皇宮大	国歌	国旗	国體	親善交	信忠義勇
I	2	1	0	1	2	1	0	1	1	1	1	2	1	0	2	0	0	1	1	0	0	0	0	0	1
	3	0	1	0	3	1	1	0	0	0	0	2	4	0	4	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
	4	0	1	0	0	1	1	0	1	0	0	0	1	4	6	0	5	1	0	0	0	2	0	0	2
	計	1	2	1	5	3	2	1	2	1	1	4	6	4	12	0	5	3	1	0	1	2	0	4	4
	%	1.2	2.5	1.2	6.2	3.7	2.5	1.2	2.5	1.2	1.2	4.9	7.4	4.9	14.8		6.2	3.7	1.2		1.2	2.5			4.9
II	1	1	0	0	1	1	0	0	1	1	0	1	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	2	0	0	2	2	1	0	1	1	0	2	0	0	2	0	0	2	0	1	0	0	0	0	0	1
	3	0	1	0	2	1	2	1	1	1	0	2	3	0	4	1	0	3	1	0	0	0	0	0	2
	4	0	1	0	0	1	0	0	2	0	0	0	3	0	9	2	0	5	1	0	1	0	0	0	6
	計	2	4	2	11	5	2	3	8	4	0	6	14	2	27	4	2	20	4	2	1	1	4	18	18
III	1	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	2	0	0	2	1	1	0	1	1	2	1	2	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2
	3	0	1	0	2	1	2	1	1	1	1	4	0	4	1	0	2	1	1	0	0	0	0	0	1
	4	0	1	0	0	1	0	0	2	0	1	0	3	0	7	2	1	3	2	0	1	0	1	0	4
	計	2	6	2	9	5	5	2	7	6	7	6	12	7	24	4	3	21	3	2	1	2	5	18	18
IV	1	1	0	0	1	1	1	0	0	1	1	2	0	1	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
	2	1	0	1	1	1	0	1	1	2	0	3	1	0	2	1	0	2	0	0	0	0	0	0	2
	3	0	1	0	0	1	2	0	1	0	1	1	3	0	6	1	1	1	1	1	1	0	1	1	1
	4	0	1	0	0	1	0	0	2	1	0	0	4	0	4	1	0	3	2	0	1	0	1	1	4
	計	4	7	1	8	6	4	1	6	6	3	7	13	6	28	6	4	19	6	2	2	3	6	17	17
V	1	0	0	0	2	0	0	0	1	0	2	0	0	1	2	0	1	0	0	3	0	0	0	0	0
	2	1	0	0	3	3	2	1	0	0	0	2	2	0	3	4	0	4	0	0	1	1	0	2	2
	3	0	0	0	3	0	2	0	0	0	0	0	2	0	5	1	0	2	1	0	1	2	0	3	3
	4	0	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	3	0	9	5	0	9	2	0	2	1	2	4	4
	計	2	4	0	10	7	6	1	1	1	3	4	11	5	32	14	1	28	7	1	10	6	5	25	25
V	課教	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120	120
	%	1.7	3.3		8.3	5.8	5.0	0.8	0.8	0.8	2.5	3.3	9.2	4.2	26.7	11.7	0.8	23.3	5.8	0.8	8.3	5.0	4.2	20.8	20.8

の影響を受け、各期でどのように変化し、表現されているか、そして、その時代・社会が要求していた人間が、いったいどのようなものであったかなどについて、検討する。

結果および考察

国定I期からV期までのすべての修身教科書について各課ごとに、「個人」「家庭」「社会」「国家」の4領域から内容分析し、あわせて各学年のまとめとして扱われている「よい日本人」を、生命尊重(L)、達成動機(A)という観点から分析し、修身教科書にあらわれた理

想的人間像についての検討を行なう。

(1) 領域別特徴

表2, 3は修身教科書の内容を、「個人」「家庭」「社会」「国家」の領域に分け、さらに各領域を下位カテゴリー別に分類し、その各期・各学年ごとの頻度および比率を示したものである。

また、図1, 2は理想的日本人像を語るうえで、特に重要な関係にあると思われる、「個人」と「国家」の領域についてグラフ化したものである。

以下、これらの図や表をもとに、領域別に各期の特徴を概観し検討する。

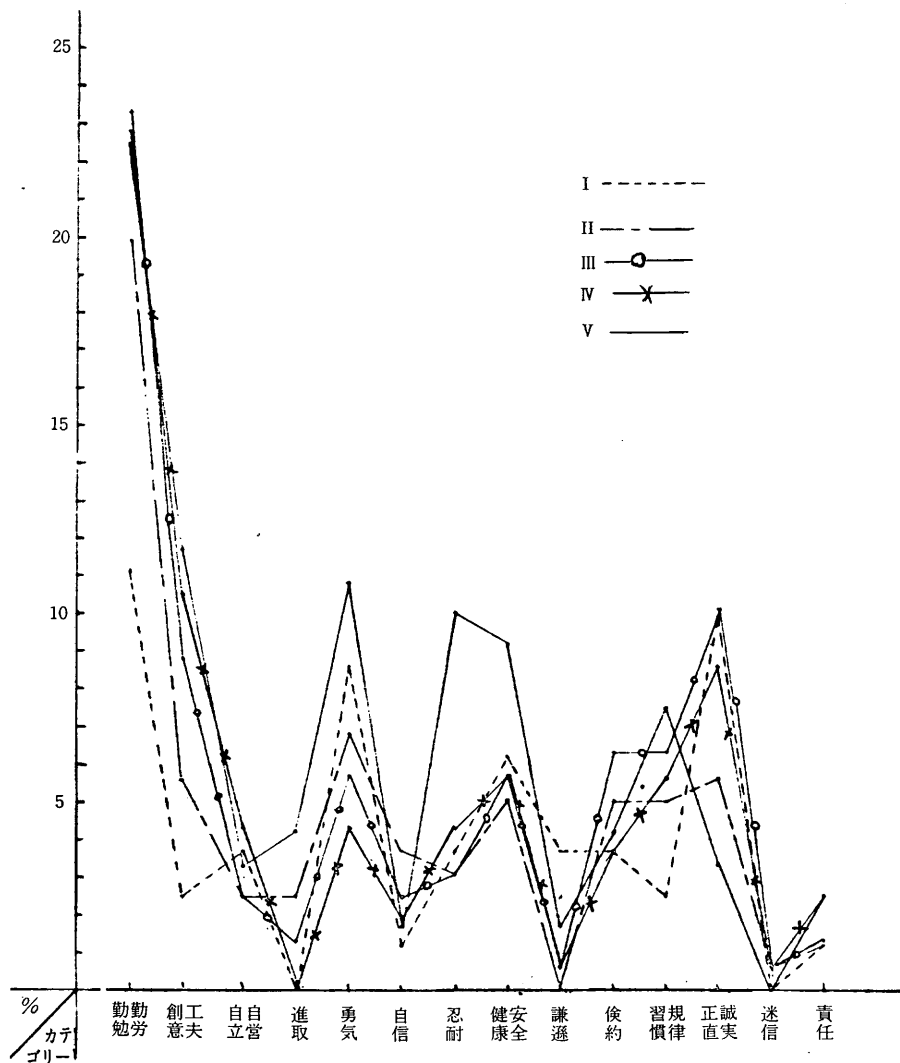


図1

まず「個人」の領域では、I期からV期まで全期を通じ、勤勉、勤労が著しく高い値を示している。I期からII期にかけて急激に増加し、III期を最高として以下、IV期V期とつづいている。達成動機と関連の深い勤勉・勤労が、各期とも著しく高いことは、明治以来の一貫した伝統である富国強兵と立身出世を背景にその実現が個々人の日々の努力に期待され、国家目的遂行への大いなる力と役割とを果していたことが示唆される。

この「個人」の領域では、全般的には創意工夫、勇氣、正直、誠実、健康といった項目が高い値を示しているが、なかでも特徴的なのは、III期の勤勉・勤労、儉約、正直

・誠実であり、V期の創意・工夫、勇氣、忍耐、健康、習慣・規律、進取である。

III期はいわゆるデモクラシー期であり、平和主義、民主主義をもとにした新しい国造りに対する姿勢がここに見られる。V期はほとんどの項目が最高の値を示す。なかでも勇氣、忍耐、健康は著しく増大している。昭和11年に2.26事件、昭和12年支那事変、昭和14年ノモンハン事件、そして昭和16年12月8日対米英宣戦布告と、日本の情勢は富国強兵がより切実な問題となり、その実現と直結した達成動機と強く関わりをもつ項目がV期に最高を示すことが特徴となっている。

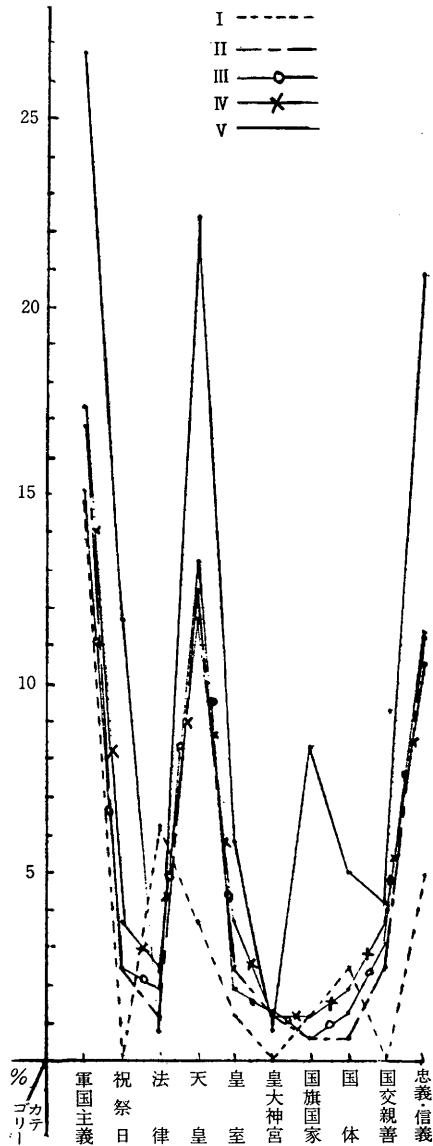


図 2

例えばⅢ期の勤勉・勤労では二宮金次郎を教材とし、「金次郎は十二の時から父にかわって川ぶしんに出ました。しごとをすまして、家へかへると夜おそくまでおきていてわらじをつくりました。……父がなくなつてからは、朝は早くから山へ行き、しばをかり、たきぎをとって、それをうりました。又夜はなはをなつたり、わらじをつくつたりしてよくはたらきました<sup>7)</sup>」と、金次郎を通じて一人一人の労働の大切さを説き、ひいては国力の強化を読みとることができる。

またⅤ期の勇気では、例えば日露戦争を教材とし、二人の兵士の死刑の状況が描かれている。「……二烈士は、最期にのぞんでも皇国臣民としての信念にみちみちて……二人は柱の前で直立不動の姿勢をとり、つつしみ深いしぐさで、はるか東の空宮城の方をふし拝み、終つてにこやかに笑みをもらした。……『天皇陛下万歳』……この力強さ、最後まで皇国を思ふの念あらばこそ、日露戦役はやがて奉天の會戦に、また日本海海戦に、日本軍が大勝利を博したのであった<sup>8)</sup>」死の寸前までなお、皇国の臣民としての態度を貫き通した英雄となつてこの二人の兵士は描かれている。太平洋戦争に突入し、いわゆる聖戦という美名のもとに、国民の一人一人に皇国の民としての自覚を促し、国民が一丸となり国を守り、ひいては大東亜の平和を守るという姿勢の強化をここに行うことができる。

次に「社会」の領域であるが、「社会」は全体に低い値となっている。その中では博愛・親切が最も高く、次いで謝恩となっている。またⅤ期に至り、礼儀、協同が急増し、全体的には僅かではあるが、敬老がⅢ期で最高となりⅣ期に落ち込みをみせⅤ期にはゼロとなっていることなどが特徴的である。

例えばⅤ期の協同では、地震による火災を教材として「……ところで、この大火事のまん中にありながら、町内の人たちが、心をあわせてよく火をふせいだおかげでしまいまで焼けないで残つたところがありました。この町の人たちは、風にあふられて四方からもえ移つて来る火を、あわてずよくおちついて、自分たちの手でふせいだのです。……年よりも子どもも、男も女も、働ける者は、みんな出て働きました。自分のことだけを考へるやうな、わがままな人は、一人もいませんでした……<sup>9)</sup>」一見したところ助け合いを通じ、市民の日常を描いているようである。しかし、その背景である戦時下という状況を考えるに、国民の一致団結が必要条件であり、その実現のために、あらゆる手段を講じていることが理解される。

博愛・親切、礼儀、協同といった項目が高いことを部分的にみていくと、前述の文章でもわかるように昔はよかつたといわれる理由が、この辺に色濃くでているようである。しかし、時代・社会という背景を考えた場合、必ずしもそうとはいいきれないところに、数々の問題点が生まれてくる。

次に「家庭」の領域であるが、全般的に親子関係、孝

行が重視され、つづいて兄弟関係となっている。

まずⅠ期では、親子・兄弟関係が著しく高く、Ⅱ期、Ⅲ期と親子関係、孝行ともに最高となっている。またⅣ期では、孝行、兄弟関係が高く、親子関係は若干の後退をみせているが、僅かながら祖先の上昇をみることができる。Ⅴ期に至り、親子関係の上昇が再びみられ、それにともない著しく祖先が上昇し、つづいて兄弟となっている。各期で比較的高い値を示した孝行が、祖先の上昇にともない下降しているのが特徴的である。

例をあげると、Ⅴ期の親子関係の中に吉田松陰を教材に取りあげたものがある。松陰と父との会話に「……『私も、第一に皇室のみさかえを祈りました。それから自分がほんたうの日本國民になることをお誓ひいたしました。』『ほんたうの日本國民とは、どういふことか。』『臣民としての道を守り、命をささげて陛下の御ためにつくすのが、ほんたうの日本國民だと……。』……百之助はわが子ながらあっぱれな魂の持主だと心ひそかに感じいった<sup>10)</sup>』というように、親子関係のなかにも巧みに臣民としての国民の姿勢が盛り込まれている。また祖先を例にとれば、「……私たちは、このやうに深い先祖の恩を受けて生活してゐるものです。……一家の中で、一人でも多くよい人が出て、業務にはげみ、君國のために力をつくせば、一家の繁栄を増すばかりでなく、また一門の名誉を高めることになります。……一人のおこなひのよしわるしは、ただちに一家一門の幸不幸となり、先祖の人の名にもかかわるのであります。……<sup>11)</sup>」このように、祖先を利用して、一人一人の努力がその一家一門にもおよぶと説き、その背景には当然日本の国を一つの家族とみる家族国家主義的傾向を読みとることができる。すべては国家のためであり、そのためには人間的な個性であるとか主体性であるとかは、必然的に無視される傾向を有している。またⅡ期からⅣ期まで、孝行が比較的高い値を示すのは、同様な理由によるものと思われる。

最後に「国家」の領域であるが、Ⅴ期を頂点として各期ともいかに軍国主義を強化していたかがわかる。Ⅴ期は軍国主義、ついで天皇、忠義・信義、祝祭日などと、僅か二項目を除きすべて最高を示し、天皇を頂点とする国家主義も著しく強められていることを示している。また、「個人」「社会」「家庭」「国家」の4領域の中でこの「国家」の領域の比率が最も高いことも特徴となっている。つまり、個人としての勤勉・勤労にしても、健康、忍耐、勇気にしても、すべては国のためであり、国

家の目的遂行のためのあくまで手段であり、家庭や社会もその一環として存在し、国家目的にむかって邁進していったように思われる。

国家主義の例では、北畠親房を教材として「……大日本は神の國である。神が、この國をお開きになり、天照大神が、天皇の御位を、ながくさかえますやうに、お伝へになった。それは、わが國だけにあったことで、ほかの國には、まったくないことである。だからこそ、わが國のことを神の國といふのである。……忠義をつくし、命をすてるのは臣民の道である。……<sup>12)</sup>」としている。この一文で分かるように、血道をあげて神国日本の正当化を図り、天皇を神格化し、国のためには個人の生命をも投げだすこと、それが我国の父である天皇への恩返しであると説いているのである。人間という最も尊重せねばならない存在を、国のために、あるいは歪んだ目的のために踏みにしてきたファシズムの時代を、ここにみることができよう。

この辺をより端的に示しているのが、各期・各学年ごとに総括として加えられている「よい日本人」という課である。この総括という意味は、修身で教えようとしている価値のまとめ的なものをいい、修身教科書がその理想として、どのような具体的人間像をつくりあげようとしていたかが示されている。

今日話題となっているアイデンティティ、あるいはモデリングの問題などと考えあわせ、非常に興味深い課となっている。

## (2) 「よい日本人」にみる理想人間像

この課の内容は、各課でとりあげた徳目を要約というかたちで、全体としての複習が可能になるよう配慮され、その基本となるものに「教育勅語」がある。国家が如何なる人間像を「よい日本人」としているかが、各期とも具体的なかたちで提示されているわけである。

表4は、Ⅰ期からⅤ期までの「よい日本人」の目次と、達成動機(A)、生命尊重(L)頻度、および内容分析の結果を示したものである。また、図3は、達成動機(A)、非生命尊重(L-)を得点化して示したものである。これらの図や表を概観してわかることは、達成動機、非生命尊重ともにⅠ期からⅤ期まで、Ⅲ期のやや横ばい状態を除いて、直線的に上昇していることがあげられる。表4の内容分析をみると、達成動機(A)、非生命尊重(L-)の上昇と歩調をあわせるように、国家主義(N)、軍国主義(M)の増加をみることができる。領

表 4

期	学年	題 目	A	L	内容分析
I	3	(27)ふくしゅー(復習)	+1		N
	4	(27)よい日本人	+1		N・I <sub>1</sub> ・H
II	1	(25)ヨイコドモ			I <sub>2</sub>
	2	(26)ヨイコドモ			I <sub>2</sub>
	3	(27)よい日本人	+1		N
	4	(27)よい日本人	+1		N・I <sub>1</sub>
	5	(28)よき日本人	+1		N
	6	(26)教育に関する勅語			N・M
	6	(27)教育に関する勅語(つづき)	+2	-2	N・M
III	2	(26)ヨイ子ドモ	+1		N・I <sub>1</sub>
	3	(27)よい日本人	+1		N
	4	(27)よい日本人	+1		N・I <sub>1</sub>
	5	(27)よい日本人	+1	-1	N
	6	(25)教育に関する勅語			N・M
	6	(26)教育に関する勅語(つづき)	+2	-2	N・M
	6	(27)教育に関する勅語(つづき)			N・M
IV	2	(27)ヨイ子ドモ	+1		N・I <sub>1</sub>
	3	(27)よい日本人	+1		N
	4	(27)よい日本人	+2	-2	N・M・H
	5	(27)よい日本人	+2	-1	N・M
	6	(25)教育に関する勅語			N・M
	6	(26)教育に関する勅語(つづき)	+2	-2	N・M
	6	(27)教育に関する勅語(つづき)			N・M
V	2	(20)ヨイ子ドモ	+2	-1	N・M・I <sub>2</sub>
	3	(3)日本の子ども	+2	-2	N・M・I <sub>1</sub> ・H
	6	(11)大御心の奉體	+2	-2	N・M・H
	6	(20)新しい世界	+2	-2	N・M

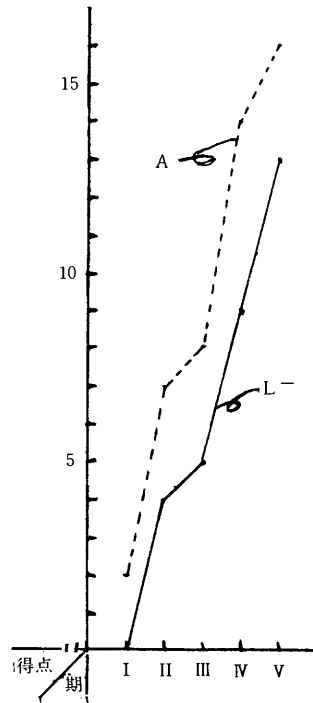


図 3

域別特徴で述べてきたことが、この「よい日本人」の課に凝縮された観がある。以下各期別にその特徴を検討していくことにする。

まずI期では、低学年がやや徳目が羅列的にあげられている。「よい日本人になるには、ちゅーぎのころをつくし、きょーだいとは、なかよくし、ともだちにはしんせつにし……なにごとにも、しゅーじきで……ゆーきがあって、しんぼうづよく……おんをうけては、わすれぬよーにし……<sup>13)</sup>」など、忠義の心、父母への孝行、兄弟仲よく、何事にも正直、恩を忘れるななど、忠孝とともに、人が人として生きる道が説かれている。高学年をみると、まず神武天皇以来の天皇が、如何に臣民を子どものように慈しんできたか、そして臣民は常に皇室を敬い、国家を守らねばならないことが示されている。後半は、ほぼ低学年と同じ文となるが、「広く人を愛する」ことが新

たに示されている。こういった心得を守ることが、すなわち勅語の趣旨に従うことであると記されている。図3をみても、達成動機(A)、非生命尊重(L<sup>-</sup>)はともに五期中最も低く、それ程の特徴をみることはできない。

次にII期に移ると、低学年はほぼI期と同様になっているが、高学年になると天皇の恩の深いことを思い、忠君愛国の心を励まなければならないことが強調される。「我等はつねに天皇陛下の御恩をかうむることの深いことを思ひ、忠君愛国の心をはげみ、皇室を尊び、法令を重んじ、国旗を大切にし、祝祭日のいわれをわきまへて、よい日本人になろうと心がけなければなりません。日本人には忠義と孝行が一ばん大切なつとめであります。

(以下略)<sup>14)</sup> 国旗により、国家への忠義の心を高め、祝祭日のいわれにより、先祖代々からの神国日本の正当化をなさしめようとの意図がその背景に感じられる。

さらに、II期からV期までの6年生に、教育勅語の原文と、その解釈が示されている。教育勅語は、その成立の歴史的背景を考えるに、勅語の徳目から考えるのではなく、軍国主義、国家主義と、それまでの時代の産物である儒教主義と近代的立憲主義とが統合されてできあが

ったものといわれている<sup>15)</sup>。また、教育勅語は明治23年10月に発布されたが、それより以前、明治15年1月に発布された軍人勅諭の教育版という意図がその基本となっている<sup>16)</sup>。つまり、天皇を頂点とした家族国家主義の具体的なイメージを与えるものとしての役割を果たしていたわけである。勅語は三段から成っており、その第一段には、皇室の祖先が我が国をはじめ、臣民を慈しんでくれた。それだからこそ、臣民は心を一にして天皇に忠を尽くし、親に孝を尽すこと、それが日本の美しいところであり、日本の教育の基本もまたここにあることが示されている。第二段、これが本論とされるところであるが、兄弟仲良く夫婦は睦まじくし、広く人々と恵みあい、慈しみあわねばならないなど、人間の尊厳、生命尊重とも言えることが説かれているが、それらのこともすべて、第二段の後半、国に事変が起きた場合、勇気を奮い、一身を捧げて天皇の国のために尽さねばならない、それが我々臣民の務めであり、天皇と国家の盛運のためには、個人の生命まで投げうたねばならないといういわゆる軍国主義、国家主義へといつのまにか結びついていく。そして第三段に至り勅語の内容は天照大神からはじまる歴代の祖先が残した教訓であり、天皇自身が我ら臣民とともにこれを守るのであるから、臣民はなにをおいても永遠に勅語を守っていかねばならぬ、と締めくくられている。このように、すべてが神・天皇・庶民という順序で流れている。そこには個人の人間性、広く人間への愛というものはみうけられない。また、勅語の解釈を6年生の最後にもってくることにより、一層その他の学年で説いてきたことの強化が図られている。

次に、「よい日本人」のⅢ期以降をみると、Ⅲ期、Ⅳ期ともに、Ⅱ期と僅かながらの変化をみせているが、ほぼ同じ内容となっている。しかし、その僅かな変化の中に唐沢<sup>17)</sup>の指摘にもあるように、Ⅲ期までは天皇の側から臣民を慈しむことが強調され、それゆえに忠君愛国に励まねばならないとされていた。「我が大日本帝国は万世一系の天皇を戴き、御代々の天皇は我等臣民を子のやうにおいつくしみになり、我等臣民は数千年來、心をあはせて克く忠孝の道に尽しました。(以下略)<sup>18)</sup>」これがⅣ期になると、「……御代々の天皇は、臣民を子のやうにおいつくしみになり、臣民は、祖先以來、心をあわせて天皇を御親とあふき奉り、より忠孝の道に尽しました。(以下略)<sup>19)</sup>」(傍点筆者)と臣民は子どもであり、天皇は親であるという具体的記述に変化してきている。そ

して、このことが日本の世界に類のない美しいことであるとされている。このようにⅣ期に至り、ますます、天皇を頂点とする家族国家主義が具体的、且つ強力に浸透しファシズムの根が進行していくさまがわかる。

Ⅴ期は、Ⅳ期までと装いを一変し、この期特有の構成となっている。修身教科書の1・2年用自体、「ヨイコードモ(上)(下)」というタイトルとなり、「よい日本人」づくりを強調しているように思われる。内容もより具体性を増している。「……私たちのおとうさん、にいさん、をぢさんなどが、みんな勇ましくたたかっています。戦場に出ない人も、みんな力をあわせて、心を一にして、国をまもらなければならない時です。(以下略)<sup>20)</sup>」このように、父や兄が戦場で戦っているのだから、皆で一致団結し国を守らなければいけないと説き、そのためには、よく勉強し、心を正しくし、よく考え、身体を鍛え、丈夫にしなければならないと結んでいる。子どもたちにより身近な教材を示し、勉強することも、心を正しくすることも、健康であることも、すべて神の血筋をひいた神国日本を守るために必要なことであると強調しているのである。6年生になると、戦争の聖戦化を徹底するため、「……日本人は御稜威をかしこみ仰ぎ、世界にほんたうの平和をもたらそうとして、大東亜建設の先頭に立ち続けるのであります。私たちは、ゆたかな資源を確保し、軍備を固めて、敵を圧迫し、ををしい心がまへを以て、建設をなしとげなければなりません。……身命をなげうって、皇国のために奮闘努力しようとするのををしこそ、いちばん大切なものであります。(以下略)<sup>21)</sup>」というように、戦いの正当化をなさしめ、権力により子どもたちにも士気の高揚を図っている。

教育勅語の背景は前述したが、同様に修身教科書自体、本質的に国民の思想統制の任務をもたされていた<sup>22)</sup>。あらゆる手段を講じ、個人を国家統制し、いわゆる「暗い谷間の時代」へと突き進んでいったことがここに示されているわけである。

以上のことから、修身教科書の内容はすべて、神を頂点とし、その血筋である天皇が現実には絶対権威者として存在し、その下に臣としての権力者という構造になっており、時の権力者は、神・天皇を通し巧みに庶民を支配し、教育者もまた権力者の範疇に属していたことは、教育もまた、国民支配のための思想統制に利用されていたと言わざるを得ない<sup>23)</sup>。個性・主体性といった人間らしさは無視され、祖先からタテにつながった家族主義こ



そよしとされ、情緒的に天皇を父、皇后を母、その子どもらである庶民という図式を成り立たせ、権力者と庶民の支配、服従関係を、より一層強固なものとし、家族国家主義の完成となっていた。

和辻<sup>24)</sup>によると人間と、その人間が住む風土とは呼応関係にあり、それゆえ日本という風土に生きる日本人は、受容的・忍従的という特性をもつという。狭い風土に生きる農耕民族としての日本人は、その風土の条件に自分自身をあてはめていった。つまり、自然との同一化を行なった。そこに、日本人特有の美的感覚が生まれただのであるが、一方、自然の猛威をあまんじて受け、じつと耐え、通りすぎることを待つ特質は、狭い耕地からより多くの収獲を得るといふことと相まって、命令系統がより速く正確に伝わっていくヒエラルキーをつくりだした。そのため権力にいち早く追従していく姿勢を生みだし、自己の同一化の対象は、自己自身が選択したのではなく、権力者から与えられたものであった。その与えられた役割を全うすることがよりよく生きていることであり、精神の漂流を知ることのできる者のみが、その枠組からのがれることができたのである。個人の自由、責任、役割、そしてそれらを含む個人の尊厳はどこかに取り残され、モデルとしての、あるいは同一化の対象としての具体的、且つ理想的な人間像は生まれにくかった。

こういった日本人の資質の上に、さらに教育の場から追い打ちがかけられた。個人の拠って立つ基盤は、家族であり、その一門であり、現人神である天皇であると、権威者である教育者によって説かれてきたのであった。そして修身教科書は、その具体的、且つ理想的な人間像を人々の前に出現せしめたのである。それも、国家の大義に忠誠をつくす人物として登場させたのである。その人物らに自己を投影し、国家の意志に賛同する者、あるいは逆に叛逆する者、様々な矛盾を抱き、多くの犠牲の上に、1945年8月15日、そこに一つの結果を示した。

#### おわりに

以上のように本研究では、国定Ⅰ期からⅤ期までの小学校修身教科書を領域別に検討し、理想的な日本人像とは何かを述べている「よい日本人」については、生命尊重、達成動機を中心に内容分析し、それを参考に、その時代・社会が強調している人間像について考察してきた。そして、当初の予想通り教科書のもつ人間観や教育観、価値観といったものが強く国家の思想統制を受け、内容

を大きく支配していることが確認できた。また、教科書というものがこれほどまでに、時代・社会の移りゆくさまを敏感に反映していることをあらためて再認識した。

唐沢は本来の理想的人間像のあり方について、「人類一般に通ずる普遍的な共通性と、その国のもつ歴史・社会的な条件を充たす性格が求められる<sup>25)</sup>」と指摘している。しかし国定修身教科書には、普遍的な国際性といった姿はみられず、先進国、近代化へ急速に歩みつけ、歪んだ方向として軍国主義・国家主義へと傾斜し、当然そういった国家の意図する人物が理想的人間像となっていた。これがまた、理想像といいながらも、その時代・社会の枠をのり越えることができない、すなわち、その時代・社会の体制に即したものとなっていくことである<sup>26)</sup>。修身教科書は、その典型といってもよいであろう。

理想的人間像は、とりもなおさず個々人のアイデンティティの対象であり、モデルである。その人物から多くのことを学び、自分自身の役割、位置といったものを知らしめてくれるものである。かたよった価値観の社会では多くの間違った役割意識をもつ人々を生み出し、また価値観の多様化した社会でも同様の人々を生み出す。そこに教育の責任の重さがあり、且つ難しさがある。本研究の今後の課題もそこにあり、こういった人間像が、どのようなかたちで子どもたちに影響を与えたのかを、でき得る限り、実証的にとらえていく必要性を感じる<sup>27)28)</sup>。

#### 謝 辞

本研究を行なうにあたって、貴重な資料をお貸し下さりまた、御助言をいただいた川瀬八洲夫先生、落合聰三郎先生、鈴木敬司先生、大瀧ミドリ先生はじめ多くの諸先生方に深謝致します。

#### 引用文献

- 1) 唐澤富太郎：「教科書の歴史」、創文社、東京（1956）序文
- 2) 橋口、三角、鮎川、今井、浦部：「教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に、その1 国語について」東京家政大学研究紀要第18集（1）（1978）
- 3) 橋口、三角、鮎川、今井、浦部：前掲書
- 4) 唐澤富太郎：前掲書
- 5) 橋口、三角、鮎川、今井：「教科書の内容分析—生命尊重と達成動機を中心に、その2 修身について」

- 東京家政大学研究紀要第19集(1)(1979)
- 6) 橋口, 三角, 鮎川, 今井: 前掲書
  - 7) 第三期国定修身教科書, 尋常小学修身書卷三, 「第四, しごとにはげめ」
  - 8) 第五期国定修身教科書, 初等科修身三, 「十九, 北満の露」
  - 9) 第五期国定修身教科書, 初等科修身二, 「九, 焼けなかった町」
  - 10) 第五期国定修身教科書, 初等科修身四, 「四, 父と子」
  - 11) 第五期国定修身教科書, 初等科修身四, 「二, 私たちの家」
  - 12) 第五期国定修身教科書, 初等科修身二, 「六, 日本は神の国」
  - 13) 第一期国定修身教科書, 尋常小学修身書第三学年, 「だい二十七, ふくしゅー(復習)」
  - 14) 第二期国定修身教科書, 尋常小学修身書卷五, 「だい二十七, よい日本人」
  - 15) 梅溪 昇: 「明治前期政治史の研究—明治軍隊の成立と明治国家の完成」 未来社, 東京, p. 302—304 (1963)
  - 16) 梅溪 昇: 前掲書, p. 302—304 (1956)
  - 17) 唐澤富太郎: 前掲書, p. 449 (1956)
  - 18) 第三期国定修身教科書, 尋常小学修身書卷五, 「第二十七課, よい日本人」
  - 19) 第四期国定修身教科書, 尋常小学修身書卷四, 「第二七, よい日本人」
  - 20) 第五期国定修身教科書, 初等科修身一, 「三, 日本の子ども」
  - 21) 第五期国定修身教科書, 初等科修身四, 「二十, 新しい世界」
  - 22) 唐澤富太郎: 前掲書, p. 344 (1956)
  - 23) 唐澤富太郎: 前掲書, p. 757, 758 (1956)
  - 24) 和辻哲郎: 「風土」岩波書店, 東京, p. 26 (1963)
  - 25) 唐沢富太郎: 「理想の人間像—各国の教科書にみる」中央公論社, 東京, 序文 (1976)
  - 26) 唐沢富太郎: 前掲書, 序文 (1976)
  - 27) 森澤優子: 生命尊重と教育に関する一考察——修身教科書の分析を通して——昭和52年度東京家政大学卒業論文
  - 28) 本論文の一部は第20回日本教育心理学会総会において報告した。